□はリンク　　※はWAMNETの事業者情報にリンク

事業所名　ローゴム　※

日付　平成 21年 3月 31 日

評価機関名　特定非営利活動法人 ライフサポート

評価調査員　在宅介護経験15年

評価調査員　在宅介護経験8年

自主評価結果を見る

評価項目の内容を見る

事業者のコメントを見る（改善状況のコメントがあります！）※

1．評価結果の概要

講評

全体を通して（特に良いと思われる点など）

平成13年春に開設してから今回訪問した時には、もうすぐ丸8年経過する年月をピック病の利用者のケアに専念してきた。アルツハイマー病や脳血管障害による認知症の人に対するケアは、どこのグループホームや介護施設でも、数多い人々に対して行われているが、ピック病の人を対象に、この8年間専門的にケアしてきたのは、全国で、少なくとも岡山県で唯一のケアのプロ集団である。そして病人であっても、一人ひとりを人間として大切にケアしてきた事に敬服している。私たちは外部評価という形ではあるが、この8年間の内、平成16年度から5年間、利用者と職員の皆さんに接する事が出来、ケアの真髄に触れる事が出来た。

（社）認知症の人と家族の会が平成14年に岡山で全国研究集会を開催した時に、このホームの管理者の中野さんが、事例発表された時の内容を見直してみた。その時に主張された事は、利用者は全員女性で、50～70歳代の人、つまり若年性の認知症の人が殆どだった。①利用者にとって居心地の良いホームでなければならない（家庭が気楽な場所とは限らない）、 ②利用者にとって必要なのは薬ではなく、気楽で落ち着ける人間関係が必要（利用者同士や利用者と職員及び利用者と家族）、 ③グループホームに居る団欒の効用、 ④ご主人の訪問が多い（面会簿を見るとまるで出勤簿のよう）、 ⑤グループホームケアの成功の鍵は職員のチームワークの良さ（お年寄りと一緒の生活を心から楽しむ）、 ⑥再びその人らしい輝きを取り戻せるような試みがグループホームケア（人間らしい生活の在り方を見直す）、⑦ターミナルは自然の流れで、その人らしく生きる事を支えて行く、 等の考え方をホーム開設から1年余りの段階でこのような主旨を述べていたのを改めて見て、認知症ケアに対する一貫した考えを初期から持っていたんだと改めて思った。

その当時からホームにおられた利用者の方々も多く居る。私達が利用者の方々にお会いした時は身体的には未だ元気な人が多く、よく散歩に出掛ける事も多かった。ホームの中の長い廊下を歌を唄いながら何往復もして動いていた人々を思い出す。しかし今年の訪問では殆どの人の身体的機能が衰えて、自立では歩けない状態にある。要介護5の人が7人も居る。歩けなくても自分の足を出す、あるいは上げようとする意志がある限りはその人を抱えて歩かせる。実際に全面介助であるが、自分の足を動かしているという意識をいつまでも持って貰いたいと職員は介助の気持ちを持ち続けている。そして、身体機能が衰退していくと同じ姿勢を続けると褥創になる恐れもあるので、同じ場所や姿勢で2時間以上居続ける事をせず、リビングルーム内でソファに移動したり自分の居室を行き来している。又嚥下障害に対しても食事及び水分補給に工夫を凝らしている。

このようにケアする手を惜しみなく、今居る人が元気で長く生きて欲しいとの思いで、職員全員が

特に改善の余地があると思われる点

これからの認知症ケアの在り方として、病気に対するケアというよりは、人間としてケアをして行く事が重要だと考える。このホームでのケアの仕方や考え方を他のグループホームの改善の参考にさせて貰いたい。

２．評価結果（詳細）

Ⅰ 運営理念

番号	項目	できている	要改善
1	理念の具体化、実現及び共有	○	

記述項目	グループホームとしてめざしているものは何か
記述回答	1、 自主評価について･･･ 自主評価全般に言えることであるが、このホームはピック病という普通の老人性認知症のケアでは利用者が落ち着いて生活出来ないので、特殊なケアが必要であり、又重症化しているという観点に立つと普通の評価基準が当てはまらない項目が多く、評価不能となっている。又地域性から一つのホーム単独では行えない事もあるので、評価不能になっている。 2、 全体的に見て･･･ 利用者一人ひとりが、生きがいを持って、元気に健康で毎日を過ごして貰いたい。そして、人間としての気品を損なわない様（ケアの仕方によって損なう）、そして本人は無防備なので、恐れと怯えがないようにして生活を送らせてあげるよう、利用者と職員間、利用者と家族の人間関係をしっかり保てるような環境作りをしている。

Ⅱ 生活空間づくり

番号	項目	できている	要改善
2	家庭的な共用空間作り	○	
3	入居者一人ひとりに合わせた居室の空間づくり	○	
4	建物の外回りや空間の活用	○	
5	場所間違い等の防止策	○	

記述項目	入居者が落ち着いて生活できるような場づくりとして取り組んでいるものは何か
記述回答	1、 自主評価について･･･ 建物や設備について改善する事項はない。スウェーデンから直輸入したホームであり、居室の面積も広く取っているので、ゆったりと過ごせる。又家族が来ても過し易い。 2、 全体的に見て･･･ リビングルームには食堂テーブルとソファが置いてあり、利用者がこれらの椅子を活用して、出来るだけ良い居心地が保てるようにしている。利用者同士で言語によるコミュニケーションが出来る人は殆ど居ないので、リビングルームに座っている人同士が、声を高らかに息鳴させると他の人が同じように反応している。これがこの人達のコミュニケーションなのだろうかと思う。リビングルームでは常にＣＤによるＢＧＭを流している。「いとおしい私の名もあなたはもう思い出せない　この手のひらを握り締めて　やさしくほほえむけれど」ある家族が聴くたびに涙するという歌の一部をリーダーが教えてくれた。

Ⅲ ケアサービス

番号	項目	できている	要改善
6	介護計画への入居者･家族の意見の反映	○	
7	個別の記録	○	
8	確実な申し送り･情報伝達	○	
9	チームケアのための会議	○	
10	入居者一人ひとりの尊重	○	
11	職員の穏やかな態度と入居者が感情表現できる働きかけ	評価	不能
12	入居者のペースの尊重	評価	不能
13	入居者の自己決定や希望の表出への支援	評価	不能
14	一人でできることへの配慮	○	
15	入居者一人ひとりにあわせた調理方法･盛り付けの工夫	○	
16	食事を楽しむことのできる支援	○	
17	排泄パターンに応じた個別の排泄支援	○	

Ⅲ ケアサービス（つづき）

番号	項目	できている	要改善
18	排泄時の不安や羞恥心等への配慮	○	
19	入居者一人ひとりの入浴可否の見極めと希望にあわせた入浴支援	○	
20	プライドを大切にした整容の支援	○	
21	安眠の支援	○	
22	金銭管理と買い物の支援	評価	不能
23	認知症の人の受診に理解と配慮のある医療機関、入院受け入れ医療機関の確保	○	
24	身体機能の維持	○	
25	トラブルへの対応	評価	不能
26	口腔内の清潔保持	○	
27	身体状態の変化や異常の早期発見･対応	○	
28	服薬の支援	○	
29	ホームに閉じこもらない生活の支援	○	
30	家族の訪問支援	○	

記述項目	一人ひとりの力と経験の尊重やプライバシー保護のため取り組んでいるものは何か
記述回答	1、 自主評価について･･･ ピック病という病態から重度化していくと、ここの利用者の状態とこのホームで行う重点的なケアの仕方を独自で考えている。この利用者が少しでも安心して暮らせるケアをする為には、職員の人手の問題がある。現在のグループホームの常識的な人員配置では、十分なケアが7人配置では難しく、唯直面している課題を追っていかざるを得ないという場面を見た。認知症ケアと一言で済まされない現場をもっと分析して、介護の有り方と人員配置をもっと慎重に考えていく必要があるかと思う。 2、 全体的に見て･･･ 利用者一人ひとりの日常の状態を記録し、人間が生きていく為の基本の機能から注目した事を抽出し、それをケアの重点項目として挙げるという介護計画の作り方は、その人にとっても的を得たものだと思う。このような考え方をグループホームのケアの一般的な考え方に応用していきたいモデルとして関心を持った。

Ⅳ 運営体制

番号	項目	できている	要改善
31	責任者の協働と職員の意見の反映	○	
32	災害対策	○	
33	家族の意見や要望を引き出す働きかけ	○	
34	家族への日常の様子に関する情報提供	○	
35	運営推進会議を活かした取組	○	
36	地域との連携と交流促進	評価	不能
37	ホーム機能の地域への還元	○	

記述項目	サービスの質の向上に向け、日頃から、また、問題発生を契機として、努力しているものは何か。
記述回答	1、 自主評価について･･･ 地域との関わりについては、母体と共に立地している条件や、ピック病という特別な接し方が必要な人との関係から地域との関わりについて考慮すべき事で、この評価基準に該当しない事が多い。 2、 全体的に見て･･･ 運営については、型式ばった事より、毎日の実践の中で職員との共有化、協働化という事が必要で、その都度現場で話し合ったり、職員全員に利用者の毎日の状態をしっかり把握する事を必要としている。即ち、人間の資質が職員に求められている。又、大きく変わってきたのが、このホームには常勤の7人（普通のホームは6名）の配置があるが、現在、その内で男性職員が5名居る事である。女性はどうしても個人の事情によって退職せざるを得なくなる。特別なケアが必要な職場では、ずっと長くこの仕事に携わっている必要があり、その点男性がじっくり落ち着いて職務を果たし、後輩に繋いで欲しいとの思いが経営者側にはある。